

いやす
なおす
たもつ



文書館資料にみる
病気・医療・健康

22

「ヒポクラテス写真」（小田家文書（山口市吉敷）194）

医学あれこれ④

西洋医学の導入

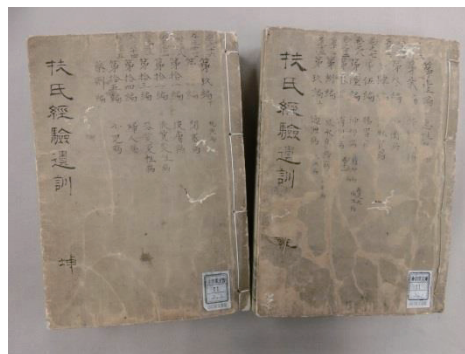
古代ギリシャでは、紀元前 5 世紀頃から市民による直接民主政の下で、演劇・建築・哲学・数学・医学などが発達しました。

「ヒポクラテスの誓い」（医者倫理・任務などについての、ギリシャ神への宣誓文。裏面参照）で知られるヒポクラテスは紀元前 4 世紀頃の古代ギリシャの医者です。医学を原始的な迷信や呪術から切り離し、臨床と観察を重んじる経験科学へと発展させたこととされ、後の西洋医学に大きな影響を与えたことから、「医学の父」「医聖」「疫学の祖」などと呼ばれて象徴的な存在となりました。

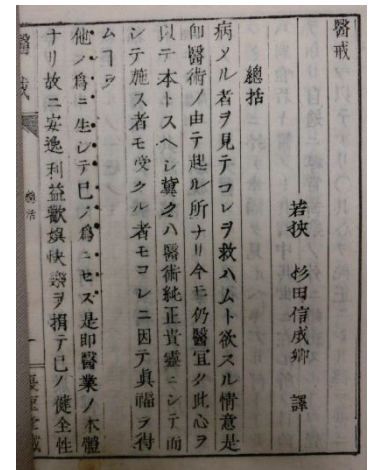
日本でも、江戸時代の蘭方医たちの努力によって西洋医学が導入されると、ヒポクラテスは理想的医師像として広く知られるようになりました。その普及に一役かったのが写真のような肖像であり、東洋医学（漢方医学）における「神農」の図と同様に、西洋医学

の象徴として飾られることもあったようです。

上写真は、江戸時代に萩藩一門の吉敷毛利家の医者を務め、明治以後も代々医者であった小田家に伝来したヒポクラテスの肖像写真です。



同家文書には「解体新書」（裏面参照）や、緒方洪庵が訳出したフーフェラントの「扶氏経験遺訓」（写真）など、西洋医学の書物が数多く残されています（解説シート 23 参照）。



「医戒」

ドイツの医学者フーフェラントの著書の一部を杉田玄白の孫にあたる杉田成卿（1817～59）が訳出したもので、その冒頭には、「病メル者ヲ見テコレヲ救ハムト欲スル情意是即醫術ノ由テ起ル所ナリ」とあります。医者たちは、医療を担う努力や研鑽を怠りませんでした。

（小野家文書 1072）

ヒポクラテスの誓い

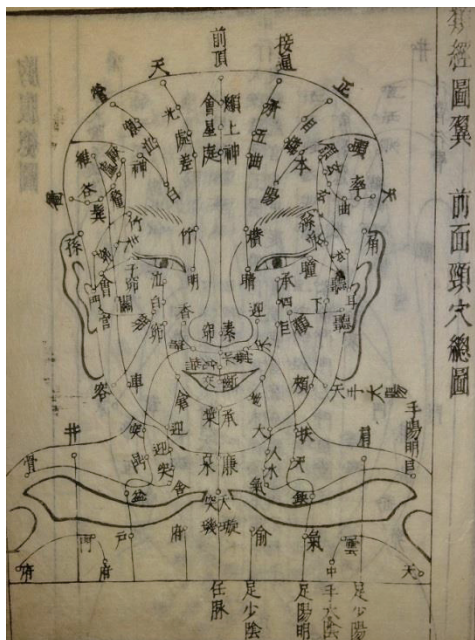
医の神アポロン、アスクレーピオス、ヒギエイア、パナケイア、及び全ての神々よ。私自身の能力と判断に従って、この誓約を守ることを誓う。

- この医術を教えてくれた師を実の親のように敬い、自らの財産を分け与えて、必要ある時には助ける。
- 師の子孫を自身の兄弟のように見て、彼らが学ばんとすれば報酬なしにこの術を教える。
- 著作や講義その他あらゆる方法で、医術の知識を師や自らの息子、また、医の規則に則って誓約で結ばれている弟子達に分ち与え、それ以外の誰にも与えない。
- 自身の能力と判断に従って、患者に利すると思う治療法を選択し、害と知る治療法を決して選択しない。
- 依頼されても人を殺す薬を与えない。
- 同様に婦人を流産させる道具を与えない。
- 生涯を純粋と神聖を貫き、医術を行う。
- どんな家を訪れる時もその自由人と奴隷の相違を問わず、不正を犯すことなく、医術を行う。
- 医に関するか否かに関わらず、他人の生活についての秘密を遵守する。

この誓いを守り続ける限り、私は人生と医術とを享受し、全ての人から尊敬されるであろう！

しかし、万が一、この誓いを破る時、私はその反対の運命を賜るだろう。

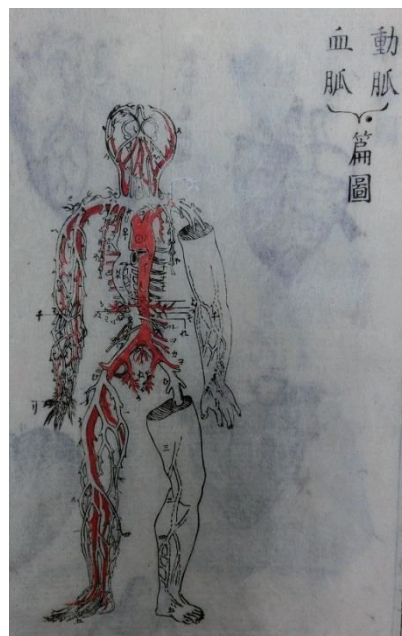
漢方と蘭方



「十四經發揮鈔」(じゅうしけいはつきしょう)

「十四經發揮」は、中国の医学古典の一つで、1341年に元の滑寿が記したとされています。経絡（人体の中での代謝物質の通り道）・経穴（いわゆる「ツボ」）の教科書として編纂されています。本書はその和刻本であり、万治4年（1661）に谷村玄仙が編集したものです。

(小野家文書 1354、1360、1378～1381)



「解体新書」

ドイツ人医師クルムスの医学書のオランダ語訳『ターヘル・アナトミア』を江戸時代の日本で翻訳した書。西洋語からの本格的な翻訳書として日本初であり、蘭学の嚆矢となりました。杉田玄白・前野良沢・中川淳庵らの努力で刊行に至りましたが、翻訳作業の中心であった前野良沢の名は「解体新書」にはありません。(小田家文書〔山口市吉敷〕53)